

小児科学 (第3版)

大関武彦, 近藤直実 (総編集)

内山 聖, 杉本 徹, 田澤雄作, 田村正徳, 原田研介,
福島義光, 松石豊次郎, 山口清次, 脇口 宏 (編)

『小児科学第3版』は1,924頁の分厚い教科書です。私も編集を担当した初版(1997年発行)の1,680頁に比べて約13%増え、執筆者も204名から350名に増えており、専門性が高められ、充実した内容の本になっています。執筆者は第一線の小児科開業医から大学医学部小児科学の臨床系教授のほか、社会学系、栄養学系、リハビリ関連、行政職の方まで、幅広く、深く専門性が高められています。世界的に有名な英文の小児科学教科書、通称『ネルソン小児科学』(Nelson's Textbook of Pediatrics)に内容的には匹敵する教科書です。医学生にはちょっと重いけれど、研修医、修練医(後期研修医)には小児科全般の知識の詰まった宝宝箱として、小児科専門医には新知見を習得できる必読の書として座右に置いてほしいと思います。小児科以外の専門医には、自分の専門分野の知識と比較しながら小児科全般の知識の取得に役立てていただけるでしょう。また、学生時代に勉強したことがどのように変化してきたかを知るための百科事典の利用にも役立つでしょう。新しい疾患概念、病態の新知見、診断技術・治療の進歩を教えてくれ、学ぶことができます。きっと、時代とともに変化するスピードに驚かれることと思います。

第3版では巻頭に16頁のカラーグラフがあり、代表的な疾患を目で見つけることができるようになるかもしれません。目次は27章に分かれ、初版の38章から一見縮小されたようにみえますが、知識の分散を避け、うまくまとめられた結果と思われます。

例えば、第1章「小児の成長と発達」では、小児、特に思春期の心理的、社会的な問題への対応として、家庭、友達、社会や受験勉強、情報化などのかかわりなど、広範に記載されています。特に神経系の発達について、脳の分化・発達は「脳の時代」にふさわしく、よくわかるよう詳細に書かれています。

第3章「治療」では、栄養、保温、安静や薬物療法、ターミナルケアまで広範で、各論では薬物、輸液、静脈栄養のほか透析治療や生物製剤(輸血)による問題点、移植・再生医療、遺伝子治療とまとめられ、治療時の心理の問題に至るまで医師のかかわりが書かれています。

第6章では「重要な病態と小児科学に関連した重要事項」として、QOL、インフォームド・コンセントや医療・研究の倫理問題、電子カルテや新しい研修制度を含めた医学教育にまで及び、現在の小児科医療のあり方が社会的な問題として記載されています。

第7章「先天異常・遺伝疾患」では基礎的部分を理解しやすく解説し、遺伝カウンセリングの意義にもかかっています。そのほかにも、新生児、低出生体重児、多胎児の医療の現状や倫理対応の詳細、白血病や類似疾患、新生物・類似疾患の分子生物学を含めた新しい診断と治療の詳細、神経疾患の難解な病態がわかりやすく記載されているのはありがたいことです。さらに、近年、小児科でも急増し、大きな課題となっている精神疾患・心身医学的問題について、苦手な先生にも理解しやすく記載されています。小児科医に必要な他科疾患に役立つ記載もあり、他科に紹介すべき時期の判断に役立ちます。

読んでみると、最近の小児科学の進歩のすごさに驚きを感じ、小説を読むより魅入られるでしょう。

良い本です。ぜひとも、新しい知識の習得と整理に使ってほしいと思います。

京都府立医科大学名誉教授・小児科学
澤田 淳

●B5 頁1,924 2008年

定価29,400円(本体28,000円+税5%)

[ISBN978-4-260-00512-8] 医学書院刊